

## 四神に生きる都

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



青龍の鴨川と京都市街（南東から）

平安京という名前は、それにちなんで学校や会社や神社、また酒や菓子にも名づけられ広くわたしたちになじみがあります。そしてそれは794年に都となり、京都のいわば出発点になった日本の首都平安京にはじまるものです。当時の人々が、この都は平らかに安らかにあってほしいという真剣な願いをこめてこう呼びました。

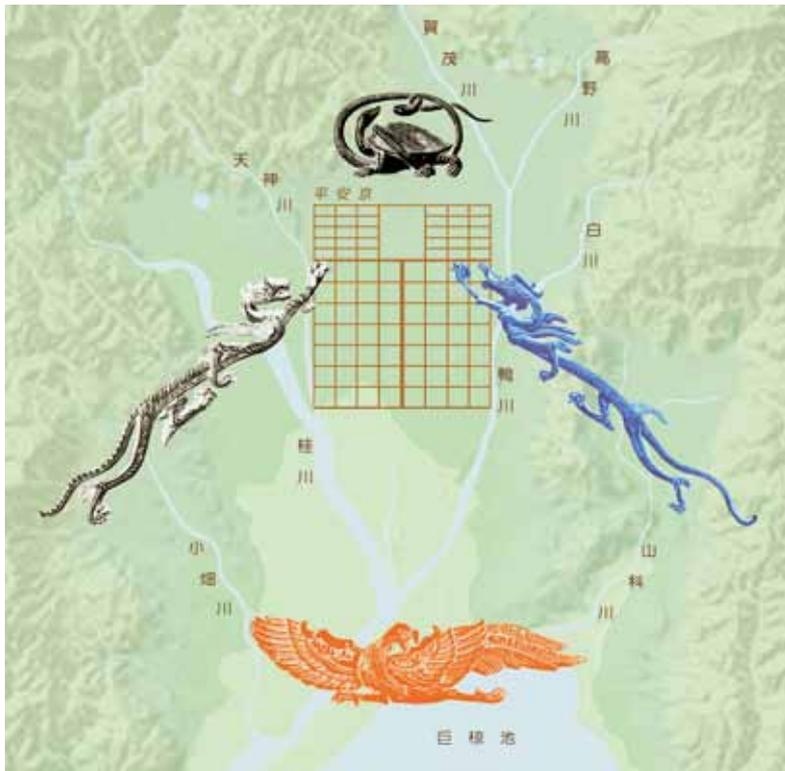
この平安京がなぜ京都に建設されることになったのかというと、その理由は実はよくわかっていません。数多くの発掘調査がおこなわれ、今までわからなかったたくさんさんの新しい歴史があきらかにな

りましたが、こればかりは未だにはっきりしないのです。なにかその理由があったことはたしかなのですが、①都をうつした桓武天皇の母方の実家の渡来人（朝鮮半島からやってきた人々とその子孫）が多く住んでいたから、②前の都である長岡京からなるべく近くて便利な場所だから、といったような理由が考えられます。

こうした考えに対して、最近、といってももうだいぶたちますが、中国人で台湾出身の黄永融さんが注目すべき説をだされました。平安京は風水思想によってつくられた、というのです。風水思想を簡

単に説明するのはむずかしいですが、宇宙を動かす力は「気」であり、目に見えない気を風や水で認識するという思想です。この気をうまくとらえられ、逃がさないような環境かどうかを判断し、そうであればそこに都をつくることになります。その気によって都は永遠にまもられ、平和で静かな首都の街ができるからです。

平安京が風水思想によって土地がきめられ、都となったと考えられる根拠は、僧侶の賢璟けんけいという人が土地の調査に同行しているからです。平安京ができたころの史料は失われているのですが、ものご



平安京と四神

との初めを記録した「らんかんしやう濫觴抄」という書物に幸いにして記録が残っています。この賢璟は、僧侶でありながら桓武天皇の政治顧問をつとめた人で、出家する前の名字を荒田井氏といい、渡来人でした。僧侶はたしかに風水思想に詳しい人が多かったですから、賢璟もその判断をおこなったと推定することは可能ではあります。「平家物語」ではいっそうはつきりと東にせいりゆう青龍、西にびやっこ白虎、北にげん玄

武、南にすざく朱雀がととのい、四神相応（都の四方をこれらの神がまもっていること）だと答申したといっているのですが、これは事実を述べるものではないとわたしは考えています。

ところでこのとき賢璟は89才で、しかもこの直後に世を去っているのです。高齢のかれがこまかい地形まで自分で調査できたとは考えられません。

では実際の平安京は風水思想に

合っていないのでしょうか。これがそうではないものですから議論がややこしくなるのですが、平安京のあった京都は今でも東に青龍の鴨川、西に白虎の山陰道、北に玄武の船岡山、南に朱雀の今はなくなりましたがおぐら巨椋池と、「気」を逃がさないようにまもってくれる四神に合う地形がうまくそろっているのです。平安京の周辺をみると、いかにも風水思想の四神相応という考えを基礎にして建設されたと思えないのですが、わたしはこれを、偶然の一致とみています。

ただ、だからといって、風水思想が京都に意味をもたなかったわけではありません。日々暮らしている平安京の街に、市民たちが平和であれと願うのは当然で、それを気がみちており、四神がまもってくれているからだ“見立て”たのです。平安京の設計に用いられたということはないのですが、そこに暮らす人々のなかには風水思想は生きていました。

(財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
理事 井上 満郎)



昭和3年頃の船岡山(左)と巨椋池(右)